

「ボールよ、届いてくれ」の祈り通じた

今季の東都大学野球春季リーグ戦から、出場チームの学生による始球式が取り入れられた。中大側としては第2戦の対日大戦が初の女性による始球式。4月11日、満開のサクラに囲まれた神宮球場で、佐野陽子さん（総合政策学部3年）が記念すべき1球を投げた。以下、佐野さんの始球式体験記。



総合政策学部3年
佐野 陽子

前夜からの風雨も収まり、快晴とまではいかなくても、まずまずのスポーツ日和でした。神宮球場に足を運ぶのは中学生のころ以来で、当時は友人とヤクルト・スワローズのファンクラブに入るほどの熱狂的なファンでした。年に1度だけ行われる「ファン感謝デー」以外は、グラウンドに足を踏み入れたことのない憧れの神宮球場で、「始球式をやら

ないか」という話をいただいた時に
は、内心うれしくてたまりませんでした。始球式をやるのが決まっていたから、いろいろな指導を受けました。連日、いざ投球練習をしてみると、スポーツに関しては、自信を持っていたつもりでしたが、どういうわけかボールが思うようにいかないのです。投げてみても、天井に当たるか地面に叩きつけるだけで、いつか真っ直ぐ投げられません。

東都大学リーグで

今季から登場の

始球式イベント

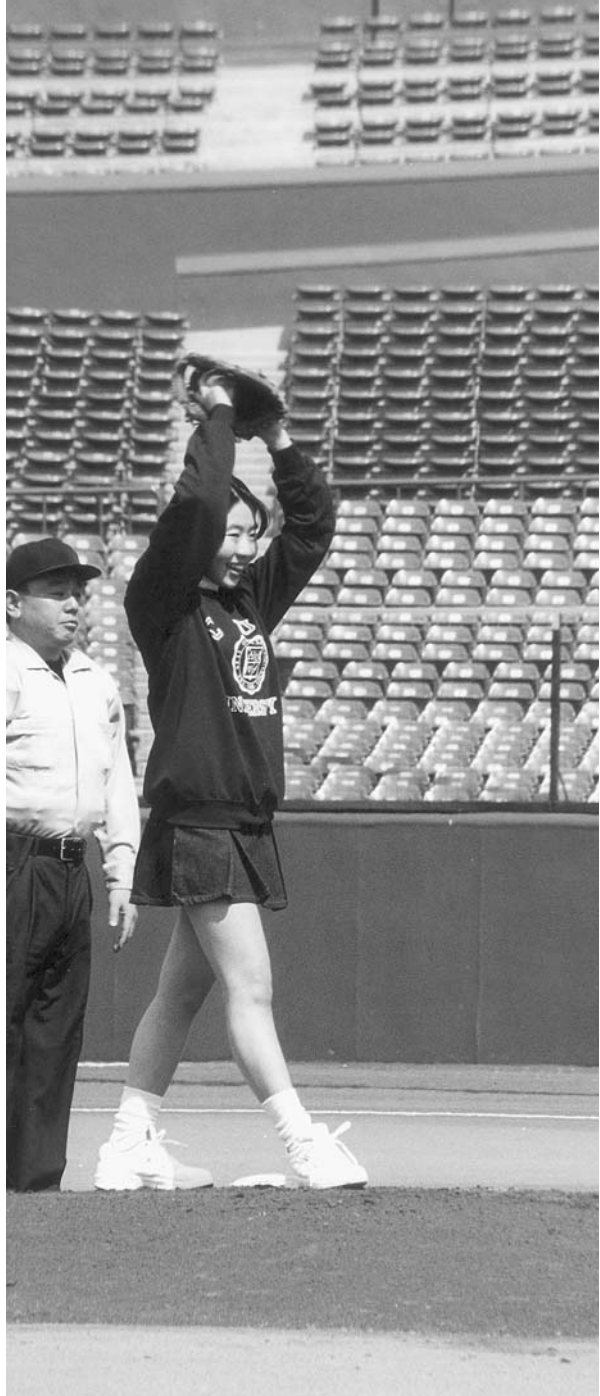
でも、しばらくすると、野球部のアドバイスの甲斐もあり、次第にコツをつかみはじめ、10球中1球ぐらいの確率でストライクが入るようになったのです。また、帰宅してからも父と何年ぶりかで、近くの公園でキャッチボールの練習をしました。

そして、いよいよ本番です。さっそく1塁側ベンチ前で、中大の選手と10球ほど肩ならししたのち、始球式の始まりです。「始球式を行うのは、中央大学・総合政策学部3年の佐野陽子さんです」という紹介アナウンスとともに、マウンドに立ちました。「ああ、私の名前をいっているな」という程度しか、私の耳には入ってきませんでした。

日大の選手がバッテリーボックスに入りました。そしてキャッチャーは私が憧れていた阿部慎之助さん（商4）です。審判が右手を大きく上げて投球OKの合図をしてくれました。マウンド上で構えて静止し呼吸を整え、「ボールよ、届いてくれ」と一瞬祈り、大きく振りかぶっていざ投球。私の右手を離れた白球は、大きな弧を描いて阿部さんのミットに吸い込まれていきました。

神宮に響いた「ストライク」

勝利を呼んだ?! 私の一球



(写真—総合政策学部3年、栗原ひろみ)

ストライク!——この声だけは、
しっかり聞こえました。テレビでよ
くみる始球式は、キャッチャーまで
ボールが届かなかつたり、ボールの
方向が定まらないことも多いのです
が、それだけは避けたいと、必死の
思いで投げた1球でした。

この時、皆さんの後押しと方向修
正の支えが、ボールを導いてくれた
ような気がしました。

始球式を終えたのち、スタンドに
戻って試合を観戦しました。お客さ

今季の中大は違う...期待熱く

んの前を横切ると「あんた、いま始
球式をやった子だよねえ。うまかつ
たよ」と、年配の方たちにいわれ、
さらには拍手までいただいでしまつ
た。その他、何人もの方から「うま
かったよ」との声をかけていただき、
とても心地よい思いをしました。

結果は中大の勝利に終わりました。

なんと6-1で日大を破ったのです。
第2戦では5-1で連破。勝ち点2
を挙げました。中大の開幕4連勝は
72年の春以来、二十八年ぶりといつ
快挙です。今季の中大は違います。

◇◇◇

今回は広報課の皆さんをはじめ、
学部事務室、野球部の方々、そして

応援をしてくれた友人たちのお陰で、
とても貴重な経験をさせていただき
ました。このような機会を与えてく
ださった方々に、心より感謝を申し
上げると同時に、中央大学硬式野球
部の方のさらなる、ご活躍を期待し
ております。